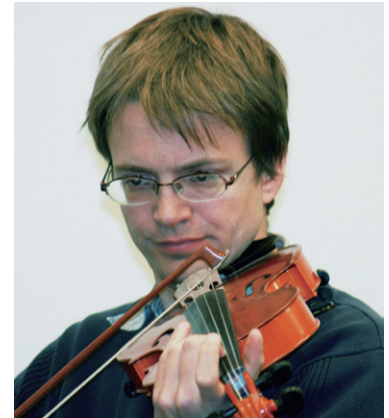


# カブリ IPMU 室内管弦楽団

コーネリアス・シュミット-コリネット Cornelius Schmidt-Colinet

Kavli IPMU博士研究員

カブリ IPMU のオーケストラは、研究棟の落成式典に皆で演奏しようと声を挙げた一部のメンバーによって結成されました。機構の事務スタッフが音頭を取り、賛同したメンバーのやる気と熱意に支えられ、気がつけば週一回の練習とオーケストラの演奏は、ここカブリ IPMU で確固たる市民権を得るに至ったのです。それではこれから、筆者がこのオーケストラで体験した思い出を織り交ぜながらこのオーケストラの話をしていきましょう。



それは IPMU に来て間もない 2009 年 11 月のことでした。夜も更け始めた頃、セミナー室を通りかかったところ、牙を剥き出した猫の餌食にされようとしている鳥の断末魔にも似た音を聞きつけ、自分の目を、いや耳を疑いました。実はそれが何と、やる気満々のバイオリニストが奏でる習い始めたばかりのバイオリンの音だったのです。好奇心でその現場に足を踏み入れた私の目に飛び込んできたのは、普段の研究活動でよくお見受けする教授の姿だったのです。彼はどう考えても私よりは年上で、IPMU の教授としての責務もこなし、その上でさらに楽器の演奏に挑戦しようという意欲に驚きました。聞いてさらに驚いたのは、バイオリンのレッスンを受け始めただけでなく、来る春に東京大学 IPMU 主催で行われる予定の新棟落成式祝賀会で一緒に演奏するために習い始めたと言うのです。私は彼のためを思って、例えバイオリンの名手と言われ

た人であってもバイオリンを始めたばかりの頃は大変な苦勞をいただろうことを、またそれを嫌という程思い知らされた経験を話しました。（実際に習いたての頃は悪戦苦闘しました。）しかし気がつけば、ヨーロッパから自分の楽器を持ってくるよう半強制的に指示を受けて部屋を後にしており、リハーサルにも式典にも参加することになってしまいました。

かくして私は、2010 年 2 月に IPMU オーケストラの団員となりました。当時、オーケストラはフルート、オーボエ、ピアノ、ビオラ、バイオリンが数名と指揮者で構成されていました。そして本番直前には多忙の村山斉機構長もコントラバスとして参加しています。ただオーケストラがどのようにしてできたのか、設立当初から永続的な活動として扱われていたのか正確なことは知りません。そもそも式典のために結成されたオーケストラ、式典後のことは実ははっきり決まっ

Special  
Contribution

いなかったのだと思います。結成当初からオーケストラは田村利恵子と川尻小登江という二人の職員によって管理運営されてきました。彼らはオーケストラの中心的な存在としてとしてその運営を取り仕切っていましたし、いつも一緒に練習をする仲間でもあります。

私が入団する時にはすでに曲目もパート分けなどの大まかな分担も決まっていた。メンバーは皆、其々に多忙な仕事の中から週に一度の集まる時間を捻出し、その時間は集中して練習する貴重な時間でした。各々の技量にも大きな差があり、学生オーケストラで活躍していた者は合奏することに慣れていますが、全くの初心者や、心得はあっても楽器に長い間触りもしていなかった私みたいな者もいました。指揮者はいえ、急遽、Youtubeにアップされている演奏を見ることで指揮者としての短期集中特訓コースを受け、国籍の違うメンバーからは鏡面対象な指揮の振り方は『アメリカにおける指揮法』なのかと質問を受けながらも、わずか2～3週間で指揮棒の振り方を習得し、また運よくリズムと躍動感の絶妙な感覚に恵まれていることが分かったのです。指揮者は、互いの音をもっと良く聞くことで音程を合わせられるようになるまで一小節ずつ丁寧に練習させたのです。

ところがもう式典も間近に迫った頃になって、機構の式典担当者が私たちの選曲に異論を唱えてきました。選曲の1つ、古典派音楽時代からの『Kindersymphonie』が当日招待している高い地位にある来賓の方々の前で演奏する曲として相応しくないのでは、との懸念が出たというのです。どうやら曲名、特にその英語訳『Toy symphony (おもちゃの交響曲)』が議論に拍車をかけ、厳かな式典の祝賀会で演奏されるには相応しくないとなったようでした。日本では驚くほど幅広いクラシック音楽を日本中の至るところで耳にします。学校のオーケストラの演奏から結婚披露宴に至るまで、またテレビ番組でもデパートのBGMでも良く使われています。でも『おもちゃの交響曲』は、そういった曲とはちょっと違うのだと捉えられていることをはっきり知ったのはずっと後のこ

とでした。さらに、その式典はIPMUにとっては大変重要なものだったので、思うに式典担当者は余計なことをされるのを恐れてそのようなことを言い出したのではないのでしょうか。それでもオーケストラのメンバーは、この『おもちゃの交響曲』に特別な思いをもって演奏に工夫を凝らし準備を進めてきていたので、この曲を演奏することに頑固にこだわったのです。オーケストラ・メンバーの説得もあったでしょうけれども、最後は機構長の支持も得た曲であることで押し切ることができました。

演奏当日、機構長のコントラバスと機構長のお嬢さんのチェロが低音部を支え、他の楽器が奏でる旋律と共に曲に深みを与えました。その他にも式典の演奏を担当した東大オーケストラのカルテットメンバーが演奏に合流してくれ、私たちの初演は大成功したのです。

これ以降もオーケストラは練習と演奏を続けています。練習は毎週セミナー室で行っています。練習への参加は極めて自由です。毎回参加しているメンバーもいれば、自分のスケジュールや仕事やその日の気分に合わせて参加したりしなかったりの方も。いつもの練習は指揮者なしでやっています。過去2年間を振り返ると、採用者と退職者に伴ってオーケストラのメンバーも相当変化しています。長い間、オーケストラには低音楽器のメンバーがいまいませんでしたが、この度、新たに2人のチェロ奏者が加わり、他のメンバーも含めて安定してきています。トランペットはレギュラー・メンバー、ビオラは時々参加してもらえます。最近オーボエも加わり、他にも吹奏楽器、ヴォーカル、パーカッションで演奏に参加する不定期メンバーがいます。メンバーには職員、学生、教員やポスドクなどなど。カブリIPMUメンバー以外からの参加もあります。実際今までに、メンバーの知り合いだったり、私たちの演奏を実際に聴いたプロの音楽家の方との共演も実現しています。

私たちのレパートリーは、というか、今までに演奏したり音合わせをただけの曲も含めると、オーケストラのメンバー構成と同じくらい様々です。バロック、



古典、ロマン派から近代音楽まで、またジャズやクリスマスソング、日本のポピュラー音楽からオーケストラ・メンバーの作曲した曲まであります。演奏曲はメンバーの誰もが自由に持ち寄れますので、今までいろいろな曲が積極的に提案されています。時に楽器の編成が偏ることがありますので、そんな時は曲のアレンジを変えたり、誰でも単純に参加できる楽器で演奏できるように楽器パートを変更したりしています。

だいたい演奏メンバーからして途中から参加する者もいれば途中で抜ける者もいるのだから、要請に応じていつでも演奏できるようなレパートリーは持ち合わせていません。実際、必要に応じて何でも演奏する主義で、手持ちの曲をひたすら練習するなどという、長く参加しているメンバーには退屈だし、新しいメンバーにはどのみちほとんど役に立たない、そんな努力はしないのです。それでも何曲かが定番になりつつあります。一つはメンデルスゾーン『結婚行進曲』冒頭部分で、理由はカブリIPMUのポスドクの多くが30代前半までの結婚適齢期にあり、研究員が結婚すると毎日のティータイムに召集されお祝いの演奏をするか

らです。このようなティータイムでのイベント演奏以外にも、カブリIPMUの周年記念行事や、年に二回東大柏キャンパスで行われる、自由にみんなで音楽を演奏してワイワイしましょう!という『わくわくコンサート』に参加しています。記念式典祝賀会で演奏した年の年末の『わくわくコンサート』ではコレルリのクリスマス・コンチェルトを演奏し、それ以降はコンサートの常連になっています。

結成から間もない頃は積極的にメンバーを勧誘し、メンバーになるかもしれない人達にこのオーケストラを宣伝することも必要でした。しかし、音楽に興味がある新しい世代のカブリIPMUのポスドクは、自分でそのルートを見つけてくる傾向にあるようです。カブリIPMUのホームページにオーケストラのリンクが貼ってあるため、日本に来る前からオーケストラの存在を知っている人もいます。オーケストラは仕事以外の社会的交流の場として市民権を得てきています。特にその強制されないゆるい参加を掲げていることが、楽しくてエキサイティングな活動として、カブリIPMUの研究者達からの幅広い支持に繋がっているのです。